

劔岳早月尾根、秋の一日

齋藤 勲 (新潟県見附市)

五

年間、毎秋にネパール山に登っていたころの話である。出発前の体調を自覚するため、劔岳早月尾根の日帰り登山で確認していた。

高所登山のためのトレーニングには日本最高所の富士山が最適だが、劔岳早月尾根の登山口の馬場島までは自宅から車で二時間半、富士山の麓までの半分以上の時間で到着する利便性がある。高所順応にはならないが、標高差二千二百五十メートル、私の足で往復十二時間の行動は、耐久力の訓練にはなる。

前年までに六千メートル峰二座の頂に立っていて、この年もまた六千メートル峰に登頂したい願望があった。

二〇一〇年十月、ある日の午前三時半の馬場島。身支度を整え、ヘッドランプを点けて闇のなかに一歩を踏み出す。いつもの出発時間より早い、六十三歳の年齢を考えれば妥当な時間であらう。

かつては十二時間で往復していたルートだが、近年は少しずつ所要時間が長くなってきた。日が落ちて暗くなる前に下山したいものだ。

体力の衰えと安全を考え、午前十一時になったらそこで登るのを打ち切り、頂上に到達していなくても下山するつもりでいる。

下山には足腰に不安の出た私の現状の下降スピードで、六時間近くかかるであろう。馬場島に帰り着くのは、順調にいつて日没に近い時間になるはずだ。

前日の天気予報では、午後から曇りであった。登山口に戻るまで崩れないことを祈る。

今年から使い始めた両手のストックに時折バランスを支えられながら、ゆっくり坦々と登る。

私の足腰の駆動系は悪い所だらけだが、身体が温まってくるにつれ登る動作に順応しつつあるようだ。ヘッドランプに照らされた光の輪の外は闇の世界だが、上弦の月や星も輝いているの

で、まったくの闇夜より少しは明るいのだろう。ザックにつけたクマ除けの鈴の音が闇のなかで響く。気温計は十四度を示している。行動するには汗もほとんど出ず、ちょうどいい。

暗いなかから、私のものとは別の鈴の音が近づいてきて追い抜かれる。

短く言葉を交わすと若い女性の単独行者であった。今日は土曜日で、駐車場の車の台数を見ると登山者も多いようだ。

闇が白々と少しずつ明るくなりだし、夜が明けてきた。白萩川対岸の猫又山の頂上に光があたってピンクに染まり、少しずつ麓のほうへ降りてゆく。空は快晴である。

六時五十分。避難小屋跡地の広場で二回目の休憩をとる。標高も二千メートルを超えたので少し指先が冷えてきた。気温計は十二度と表示している。

急いで手袋をつける。指先は一旦冷えきると手袋をつけてもなかなか回復しないからだ。

ここに着くまで、七人の若者が私を追い抜いていった。追い抜いていった人数を数えるのは、やはり彼等の速い登高スピードに心穏やかではない思いがあるためだろう。ただ、初老の登山者はマイペースで坦々と登り続けるしかない。

早月小屋の手前の池塘では、背が高いやマリンドウの花が数多く、見頃の咲き具合だった。ナナカマドは赤い実をつけているが、紅葉するのはもう少し先だろう。この夏の猛暑で色づ

くのが遅れているのだろう。

七時五十分、ルートのほぼ中間点、早月小屋に到着する。馬場島を出てから四時間二十分、標高差で千四百五十メートルを登った。

私が普段登っている越後の山では、この標高差を登れば頂上に到着し下山を始めるところだ。しかし、このロングルートでは、ここから頂上までもう八百メートルの標高差を登らなければならぬ。そしてまた、このルートの面白味は小屋から上、特に頂上近くの岩場にあるのだ。

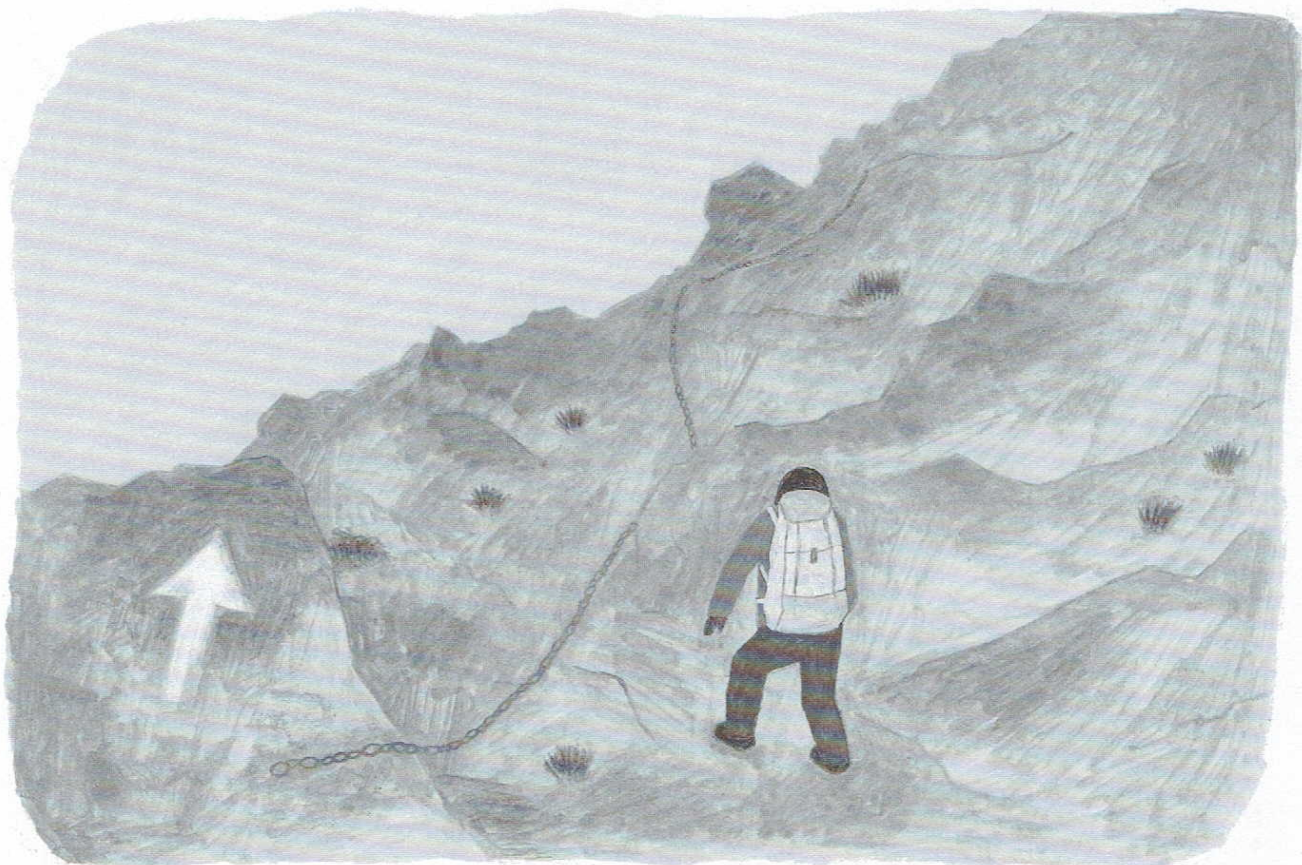
事前に設定した下山開始予定時刻の十一時まであと三時間、はたして頂上に到達できるであろうか。立山川の向こうには大日岳。立山から室堂平にかけての景色は箱庭のように見える。少しずつ雲が湧いてきた。

早月小屋のスタッフは、朝食後の歯磨きに余念がない。彼等と朝の挨拶を交わし、頂上をめざす。

小屋から二十分も登ると、先ほどの小屋のスタッフ三人が、足取りも軽く登ってきて私を追い越していった。天気がよいので近くまで散歩のようだ。小屋仕舞いまであと十日もないから、めったにない晴天のひと時を楽しみたいだろう。

二十代のスタッフのズボンの尻が何箇所も破れ、下着が丸見えだ。そのことを彼に言う、「もう七年もこのズボンを愛用している」と意に介さない。身なりへの関心が極めて薄いようだ。

二千六百メートル峰の広場で、登り



では最後の休憩をとる。「ピールを持ってくればよかったな」とスタッフの一人が言う。まったくピールでも飲みたくなるような眺望と爽やかな陽気である。今、この場所にこうしてくつろいでいることが、とても幸せな気持ちにさせる。

ここで小屋へ戻るスタッフの若者たちと別れ、私は頂上をめざす。予定していた下山開始時間には、まだ若干の余裕がある。陽あたりのいい斜面には、チングルマの葉が紅葉の盛りである。白い綿毛はもう盛りが過ぎたよう、しょぼく頭を下げていた。

早月尾根の頂上近く、標高二千九百メートル。このルートの核心部カニのハサミ付近にさしかかる。

ここで、わずかに二メートルほどのトラバースをする。いつもこの岩場では、長丁場のルートの先を急ぐあまり、横に二カ所設置された鎖を安易につかみ、足場用に打ち込まれたステンレスの大きなボルトに足を乗せて通過していた。標高二千八百メートル辺りから頂上近くまで断続的に続く鎖場のうち、登り下りで鎖に手をかけて登るのはこの場所だけだった。

適切な足場もない所なのでボルトに足を乗せるのは仕方がないにしろ、なんとか鎖に手を触れずに通過できないものか。この場所での鎖をつかむたび、そんな漠然とした思いが頭の片隅にあった。

今日は鎖をつかまずに通過できるかトライしてみよう。詰まってしまう

ら、目の前にある鎖をつかめばいい。心を落ち着かせ、最近とみに進んだ老眼の目を見開き、岩肌を観察する。よく晴れていて岩肌の凹凸がはっきりとわかる。

右手のホールドは鎖の十センチ上に、深さ一センチ、岩の幅が五センチくらいのものであった。本の背表紙をつかむ要領で前へ引きながらつかむ。左足をボルトの上に乗せ、重心を移動させてから、今度は左手のホールドを探す。やはり鎖の少し上に二センチくらい上へ出っばった岩角があった。これは下へ押しつけるようにつかむ。これだ。なんとかなりそうだ。遙かな昔、まだ若かった時代に培った岩登りの感性は「OK」と頷いている。

右足もボルトの上に乗せる。足場にしているボルトの下の空間は池ノ谷へ一気に切れ落ちている。萎縮してしまいうので足元はあまり見ないで、動作に集中する。池ノ谷から吹きあげてくる風が、撫であげるように背中を通り過ぎていく。

左足を左上の安定した岩場に置き、左手で左上のホールドをつかむ。右手を移動し、右足を移す。思ったより楽に抜けられた。

長大なこのルートで、わずかに二カ所の鎖をつかむかどうかはまったく些細なことである。だが私は、ほっとするとともに、心に湧いてくる小さな達成感と爽快感を味わっていた。

この小さなトライをする気が起きたのは、先ほど下山していった青年のせ

いかもしれない。

ランニングシューズ、タイツ、半ズボンのトレイルランニングのいでたちで、馬場島から頂上まで二時間五十分で登ったと言っていた。

富山の早月川河口から北、中央、南アルプスを縦走し、静岡の大浜海岸へ最短五日未満でゴールするトランスジヤパンアルプスレース(TJAR)の超人たちに匹敵する短時間での登高に驚嘆する。

若さと脚力、行動力を羨むとともに、自分が彼に勝るものはなんだろうと思つた。なにも思いつかない。年々老いてゆく途上にあるだけだ。数年もたてば、この早月尾根の日帰り山行もできなくなるであろう。

隠れていた競争心や見栄が後押ししたものであれば、私はたわいもない軽薄な人間だ。

登山は競争ではない。単独行者としては軽はずみな行動ではないかという自戒の念と、このルートを毎年の秋に登り始めてから八年目でのささやかなトライ成功の達成感が交錯する。能天気な私の心は「結果オーライ。前へ進もう」と呟いていた。

疲れた身体を引きずりながら、緊張する岩場を登り終え、十時三十七分、剣岳頂上の祠の脇に立った。

馬場島から約七時間、還暦をとうに過ぎた今の自分にとっては納得できる所要時間での登頂だろう。

私に勉強だけでなく山や人生につい

ても教えてくれた高校時代の恩師は、剣岳をこよなく愛していた。私が早月尾根を日帰りで往復すると言ったら驚いていたが、二時間五十分で頂上へ登る青年のことを話したら、どんな顔を

するだろうか。

見渡せば遠く南に富士山、槍ヶ岳、穂高連峰、東には後立山の山々。足元には若い日に登攀した城砦のようなハツ峰上半部、長次郎谷の源頭、源次郎尾根が見えている。西に見えるはずの白山は雲のなかだ。

一九〇七年、陸軍陸地測量部の柴崎芳太郎測量官らが宇治長次郎にガイドされ、長次郎谷を登路に、記録として残っている初登頂をした。その時に頂上で剣の穂先と錫杖の頭、火を焚いた跡のある堅穴を発見した。推定で、千二百から千三百年前に登った奈良時代の修験者のものではないかと言われている。

古代のロマンを秘めながら、今、剣岳の頂上では、静かに数人が東の間の憩を楽しんでいる。

願わくは、来秋もこのルートから、この頂の祠の脇に立ちたいものだ。登頂の満足感に満たされ、充分に眺望も楽しんだ。あとは煙草を一服すれば下山準備は完了する。そして、まだ遠い馬場島へ向けて長い下りの一步を踏み出すのだ。一カ月後には待ち望んでいたネパールへ一年振りに旅立つ日が来る。

私をせき立てるように北風が強くなってきた。

登山への精進と憧れをもち続けて

遠藤甲太(読者紀行選考)文

今は古稀を越えた筆者の八年前の山行である。律儀な方で記録もしつかりとつてあつたらしい。

六十三歳で高度差二千メートル以上ある行程の日帰り登山。若者にだつてきつい。それも毎年のネパール行を続けるための準備だという。

私がとりわけ感服したのは、今まで必ずつかんで登っていた鎖を、今回は手を触れずに岩場を攀じようと

試み、さらに上をめざさんとするその姿勢であつた。優れたクライマーを志す者は、かくあるべし。

いささかも飾らぬ、むしろあつさりとした文章・文体だけれど、けして変わらぬ登山への精進、なにより山への憧れが、この紀行文には込められている。最後の二行、剣岳の頂上から吹きつける「北風」が、筆者をこよなく鼓舞しています。



今年も開催！
「読者紀行 オブ・ザ・イヤー」

2017年11月号から2018年10月号までに「読者紀行」に掲載された全22作品(2018年8月号は1000号記念号で休載)から、優れた作品を表彰します。グランプリは、2019年1月号で発表予定です。

あなたの山行の思い出を
紀行文に残しませんか？

連載「読者紀行」では読者からの紀行文を募集し、毎月2作品を掲載しています。印象に残った山行中のできごとや思い出を文章にまとめてみませんか？ 募集要項など、詳細はP168をご覧ください。